

Title	二〇一四年度修士論文要旨；二〇一四年度卒業論文題目
Sub Title	
Author	
Publisher	三田史学会
Publication year	2016
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.85, No.4 (2016. 2) ,p.117(751)- 132(766)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20160200-0117

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

二〇一四年度修士論文要旨

〔日本史学分野〕

在地領主の「家」構造・所領経営と地域社会

— 備後国山内首藤氏を事例として —

渡邊 浩貴

戦後日本中世史学は「在地領主制論」によって牽引されてきたと言っても過言ではない。その後、理論先行型の歴史認識に批判が生まれ、現在では「在地領主論」の提起によって上部権力との関係性から在地領主像が再構築されている。しかしながら、近年の動向は「在地領主制論」での研究成果―所領経営の観点―が批判的に継承されなまま領主制理論からの脱却が図られようとしている。そのため、在地領主と在地社会・地域社会との関係性が不鮮明なまま、在地領主自体のあり方が議論され、実態論としての在地領主研究が欠如している状況にある。

そこで、本論は備後国山内首藤氏を事例に、鎌倉期から室町期にかけての在地領主の「家」構造と所領経営の相関関係や地域権力化過程の様相を、在地社会・地域社会との関係性を軸に段階的に明らかにすることを目的とする。

第一章では、西遷地頭山内首藤氏の本領形成と地毗荘の在地

社会との関係構築過程を論じた。現地調査に基づく景観復原を通じて、山内首藤氏の領主空間や領主直営地「高山門田」の開発を明らかにした。その結果、先行研究で指摘されるような、在地領主の暴力的入植過程や西遷地頭開発⇨低湿地開発といった枠組みでは把握しきれない、西遷地頭山内首藤氏と在地社会・地域環境との共生・共存・共同的関係が見出されることを指摘した。在地領主の本領形成とは、こうした在地社会における関係によって、はじめて成り立つのである。

第二章では、山内首藤氏の南北朝期一族一揆に焦点を当て、未検討史料の分析、近隣領主広沢氏の諸活動の復原を通じ、備後地域の地域紛争の諸相と一族一揆の性質を明らかにした。従来、個別的に扱われてきた同氏の一揆結合を、地域紛争のなかで捉え直した結果、南朝方勢力として広域展開する近隣領主広沢氏への対抗措置であり、かつ極めて臨戦的一揆体制であるとの結論を得ることができた。

第三章では、山内首藤氏の相続形態の変遷過程から、在地領主の「家」構造と所領経営の相関関係を検討した。かつて在地領主の相続形態は「家」構造の観点のみから分析され、単線的に理解されてきた。しかし、山内首藤氏の相続形態を見るに、領主直営地「高山門田」の維持・管理を目的とした二系統の所領相伝関係が存在していた。つまり、一方の系統では鎌倉末期に分割相続から嫡子単独相続へと移行し恒常化するが、もう一方の系統では南北朝期に集中して「高山門田」等の分割相続および氏寺を紐帯とした一揆的体制を敷いていたことが明らかに

なった。

最後に各章での考察をうけ、終章では山内首藤氏の室町期における地域権力化過程を分析し、本論を総括した。室町期山内首藤氏の「家」構造において、惣領への求心的構造は、実力行使を伴う在地紛争や地域寺社を通じた求心性と、守護の知行安堵体制を背景とする制度的求心性によって形成される。また、山内首藤氏惣領家は本領内に存在する有力地域寺社を十五世紀初期から徐々に掌握し、国人官氏との関係を構築して備後一宮社領を知行するに至る。こうして同氏は惣領の求心的構造と本領内部の地域寺社を媒介として、中世後期になると一宮ネットワークにコミットし、地域社会の一員になるまでに成長したのである。

在地領主山内首藤氏の本領形成やその維持・管理の歴史的過程には、地域環境とそれに基づく惣庶関係、在地秩序のもつ規定性、近隣領主間関係と地域紛争などの諸要因が複雑に絡まり合っていた。そうした条件のもとで、山内首藤氏の「家」構造と所領経営は密接な関係にあったのである。そして、山内首藤氏は、本領内部の地域寺社との関係を梃子に地域社会と関係を構築し、地域権力として認知されるに至ったのである。

『甲陽軍鑑』の世界観の研究

川島 拓

『甲陽軍鑑』は、高坂弾正の口述を筆録したというオーラル性に起因する誤謬が多いこともあって、長らく偽書として見なされてきた。しかし、酒井憲二氏の業績である『甲陽軍鑑大成』によって国語学的見地から偽書説を覆す論拠が示されて以来、『軍鑑』の再評価が近年進んでいる。だが、『軍鑑』の構成は必ずしも編年的ではない上に様々な事柄を寄せ集めた箇所もあるため、全容を把握しづらく史料としても使いにくい面がある。そこで本論は、『軍鑑』を史料として扱う上で便利な「見取図」を作成・提供して今後の研究に資することを第一の目標とし、その過程で浮かび上がってくる『軍鑑』の世界観について考察することを第二の目標とした。

第一章では、偽書として見なされてきた『軍鑑』を議論の俎上に引き上げるため、偽書説が覆されるまでの過程を、黒田日出男氏による研究史整理に基づいて概観した。

第二章では、『軍鑑』の構成について扱った。第一節では構成の全体像を概観した。第二節では各巻・各品の概要を巻末の表に「見取図」としてまとめ、「見取図」に記しきれない具体的な事柄（注目に値する記述の紹介や、明らかにっていない品についての比定など）について本文に記した。第三節では、

「主たる著者」としての高坂弾正、「著述主体」としての高坂、「口述主体」としての高坂、「監修者」としての高坂、「筆録者」としての春日惣次郎・大蔵彦十郎、「監修下の著述者」としての春日、「主体的著述者」としての春日および春日死後の小幡山城（下野）・外記孫八郎・西条治部、「整理者」としての小幡景憲、以上八種類の「著者」が重層的に『軍鑑』にバイアスをかけていることを述べた。

第三章では、武田家内外の描かれ方を基に『軍鑑』の世界観を論じた。第一節では、武田家中の描かれ方を示しながら、『軍鑑』における人物評価が必ずしも表面的な善悪によるものではないことを論じた。第二節では、他国家中の描かれ方を主に示しながら、『軍鑑』が家中の「つりあひ」を重んじていたことを論じた。第三節では、これまでの議論から『軍鑑』が「分別」をキーワードにしていることと、『軍鑑』における人物評価が表面的な善悪二元論ではなく「分別」の良し悪しに依っていることを論じ、最後に、『軍鑑』が長坂・跡部に宛てられた事情と、この両名が根っからの佞臣ではなかったことを論じた。

明治期における地方資産家の家族

―伊東要蔵の妻なかを事例として―

宮脇 麻里

本稿の目的は、地方資産家がどのような家族を持ち、中でも妻が如何なる位置づけであったかを明らかにすることである。具体的な事例として浜松の地方資産家である伊東要蔵の妻なかをとり上げ、伊東家においてなかの存在が持つ意味を考察した。さらに、近代の経済発展の担い手として注目される地方資産家を、家族の視点から改めて捉えなおすことを目指している。慶應義塾福澤研究センター寄託の伊東要蔵家旧蔵資料を主な史料としたが、地主の家の女性の史料がまとまって残されていることは珍しく、これらの史料を多く用いることを重視した。

第一章では、妻の家業への関与に焦点を当て、地主経営に際してのなかの役割について考察した。明治二十五年の地価修正運動および小作人管理の経過から、地元を離れている要蔵と差配人の間で指示伝達を行い、小作人の状況を詳しく報告し、時には意見を添えているなかの様子が見られた。すなわち、なかは家内で家業が順調に運営されていくための仲介者的存在として位置づけられる。

第二章においては、伊東家の子供たちと親である要蔵となかの関係性について確認した。子供の教育という観点では、男子

女子ともに当時としては高い教育を受けさせている。遠隔地の学校に通わせる場合、子供の世話は奉公人に任せられ、母なからは書簡を通じて子供たちを見守っていた。一方で、中川村の家庭内で子供が病気になる時は、なかが主体となって看病や治療を仕切っている。子育ての区切りの式典という視点から、二女の婚礼についても考察を加え、要蔵の関係者が多く参加しているほか、家や地域共同体とは異なる意識が見られる婚礼であったことを明らかにした。

第三章では、なかの病氣と葬儀に焦点を当てて、要蔵の交友関係に占める妻の位置づけについて考察を加えた。なかの医者 幹旋は、要蔵の経済活動での協力者たちによってなされており、なかの死後には地元の名士が多く悔やみ状を寄せ、葬儀に参列している。従って、要蔵のネットワークは経済活動のみならず、家族の私的な事柄にまで機能するものであったと考えられる。

以上の点から、地方資産家が活動する際、家業における妻の協力があつたことや、地元の留守宅は妻によって取り仕切られていたこと、他の企業家との関係性は家庭内にも踏み込んだものだったことが明らかになった。このように、多くの史料により、地方資産家の家族、特に妻の姿を具体的に示したことが本稿の意義である。

戦時下日本における看護婦需給情勢の認識と対応に関する研究

木野 涼介

本論文の目的は日中戦争からアジア太平洋戦争下の救護看護婦の需給情勢、募集の主体とその内実を明らかにすることである。救護看護婦は、戦時には国家的な需要が存在したこと、養成所は費用負担なく実現できる女子の高等教育機関であったこと、女性というジェンダーロールと「看護」の関連等、様々な近代的な諸要素の影響力の中に存在していたものと捉えられる。これらの要素を検討する前提として、救護看護婦の制度的側面とその運用を明らかにすることが本論文の役割である。

まず、需給情勢については、陸軍は少なくとも昭和十六年十二月に太平洋戦争が始まるまでは逼迫したものと認識していなかったと推測できる一方で、日赤としては、この時期に既に救護員の調達に苦心していることが窺えた。ただし同時に、後にみられるような、臨時救護看護婦を大量動員するような事態には、日中戦争期にはまだなっておらず、一応は「自社養成」の枠組みが取られていたことには留意したい。また、まず一応は、救護看護婦確保のために努力すべき主体、すなわち救護看護募集の「主体」は日本赤十字社だった、といえるだろう。

その日本赤十字社は、戦争の進展に伴い、制度的にもより陸

軍の影響下へ置かれてゆくこととなった。救護看護婦の給与や、陸軍病院の指定を受けた日赤病院の糧食費等は日赤の負担であったものが陸軍の負担へと変化してゆく。一方で日本赤十字社救護部の内実は、実務レベルまで陸軍出身者で構成されていた。特に救護部長は軍医監（後の軍医少将）であったことから、陸軍と日赤に単純な上下関係は想定し難い。日本赤十字社という外部の主体が陸軍に従属したというよりも、日赤の救護部が人的には陸軍の内部にあったとの構図が妥当であろう。

本論文の課題としては、日赤の認識の直接的な検討、人事についての実態的な解明が不十分な点があり、いずれも日赤の史料を用いた検討が求められるところである。

今後の展望として、本論文の考察は日本赤十字社救護看護婦を素材として、日赤救護看護婦となるという決定に際しての文化的、経済的要因の影響とその「主体性」の検討、さらには「主体」そのものの構成性を検討してゆく前提となるであろう。例えば、日中戦争期には陸軍としては組織的なプロバガンダを行う動機は薄かったといえるから、プロバガンダの影響を検討するなら、それ以降に救護看護婦となった人を対象とすべきだし、それ以前については明治以降築あげられた赤十字と天皇制の近接したイメージや、あるいは出版資本主義の枠組み等で分析することが求められるところである。

〔東洋史学分野〕

ある明代の知識人の日本認識

——鄭舜功と『日本一鑑』

袁 茂萍

中国と日本の交流は長い歴史を持っている。中国における日本記録は世界でも最も古かった。特に、明代に入ってから、日本に関連する記録が突如膨大になり、専門の本もたくさん編纂され、史上空前の日本ブーム期に入った。

当時の日本に対する一般的な認識といえば、「四夷」の一つであり、倭寇という禍の発生源であるというものであった。そのゆえ、当時の日本専門の本も殆ど海防策や倭寇対策あるいは朝貢・通商に集中している。しかし、実際に日本に來た明人である鄭舜功が書いた『日本一鑑』から反映した日本認識は独特な見解があった。

本稿は『日本一鑑』の具体的な項目の分析によって、鄭舜功が日本に対する特色ある解説や、価値観などを整理し、彼の目に映った「日本像」を明らかにした。

彼が来日前後の倭寇対策が変化があり、来日より抱くに至った「倭寇像」は「倭寇」中国の流通及び流通に誘導された貧しい日本の島民から構成された賊である。また、日本人の本性が善良であり、たまたま「凶暴」が現れても、それが風水即ち

「地氣」のせいであるという当時の一般的な「日本人像」と違った認識ができた。

鄭舜功の日本認識はこうして、彼自身が感じた日本及び収集した日本情報を彼なりの世界観から分析して形成した。鄭舜功は従来の「華夷思想」による評価を依然として抱きつつも日本は鄭にとって特別な「夷族」でもあった。日本経験によって、「倭寇」という影を貫いて透視し日本のさまざまな特徴・風俗・習慣などを記録することで日本人及び日本という国を理解・咀嚼した結果を、当時の明人に語ろうとしたのである。

しかし、『日本一鑑』は写本しか残っていなかったため、それほど後世の中国人の日本観に影響を与えなかった。それゆえ、より正確な日本情報がいくら入ってこようと、明人にとつての関心事以外の多くは無視されるかあるいは誤解された。そのため、鄭舜功のその熱意は明代の人々の中に伝わらなかったのかもしれない。

鄭舜功は最後の人生を尽くして完成した『日本一鑑』から溢れる彼の生き生きとした日本認識は、時代を越えていた今も当時の日本の息吹を伝えるものである。長い歴史を歩いてきたこの日中両国の関係にも、鄭のように実際の姿を正面から見るという考え方が、お互いに必要ではないかと考えている。

一 八世紀末朝鮮知識人洪大容の中国観

大久保 元恵

一八世紀末当時、朝鮮王朝では、清は異民族である満洲族が支配していること、壬申倭乱（豊臣秀吉の朝鮮出兵）の時に派兵をしてくれた恩義のある明を滅ばしたことを主な理由に清を忌み嫌っている官僚や知識人が多かった。一七世紀には「北伐論」という、清を倒そうという主張も朝鮮王朝内にあったほどだ。その為、いくら朝貢使節が毎年平均四回も北京に赴くといっても、積極的に清朝統治下の人物と交流する朝鮮知識人は少なく、交流することでも非難を浴びることも多かった。しかし、洪大容は当時の朝鮮半島内の朱子学的雰囲気を「迂儒」であるとし嫌う一方で、清に積極的に赴こうとし、実際にその機会を得た。そして、彼と交友関係のあった朴趾源や朴斉家は洪大容亡き後すぐに「北学議」を著し、清朝に学ぶことを提唱した。そこで、朴趾源・朴斉家に先立って一七六五年に北京に赴いた洪大容は北学派の嚆矢とも呼ばれている。

従来の朝鮮時代後期の歴史・思想史研究では洪大容や朴趾源といった十八世紀末の脱朱子学的観念の様相を見せた朝鮮知識人に「実学派」という現代に作られた概念を当てはめ、そこに彼らを分類し語ることが多かった。しかし、二〇〇〇年代に入り、その「実学」という概念そのものが戦後の朝鮮半島の政治

社会状況を表している、という研究が発表され、現在「実学」を再考する研究が日韓（特に韓国）で活況を呈している。本稿では現在「実学派」と呼ばれている一八世紀末の知識人洪大容を、「実学派」という現在の概念・評価を取り払い、当時の一朝鮮知識人として捉えなおす。そして、洪大容が一生を通じて接していた「中国」をどう見ていたのかを、彼が中国に赴いた時のことを記した旅行記『湛軒燕記』を使って考察するものである。洪大容の中国観を考察した研究は他にも数本あるが、洪大容の華夷観や洪大容の著した哲学小説を取り扱うものがほとんどである。そこで本稿では洪大容が実際に中国（清朝）に赴いた際の旅行記を取り上げ、彼の燕行体験を中心に考察を行った。

最初に本稿では洪大容が科挙を目指さず天文学や数学に力を注いだ、当時の朝鮮社会では一風変わった老論系の知識人として育ったことを述べた。そしてその上で「燕行使」の制度を改めて整理したうえで、洪大容の燕行の目的が天文学の知識収集、そして「秀才で心が通じ合える中国の人と劇談をする」であったことを明らかにした。次に燕行に随行した人間が著す「燕行録」についても言及した。そして思想面では、洪大容が燕行後に書いた『鑿山問答』で天文学的知識に基づいた洪大容独自の華夷観を示したことなどがわかった。

また、洪大容と交友があった「交友グループ」―のちに北学派と呼ばれる朴趾源・李德懋・朴齊家についても言及し、洪大容と彼の燕行体験が彼らに影響を与え、彼らの燕行を間接的に

促したことを明らかにした。そして、洪大容の中国観を、燕行前・燕行中・燕行後と時系列に分けて、考察を試みた。その結果、洪大容の中国観はまず中国を宗国あるいは天下として考えているということがわかった。そして清は、天下である中国にたてられたオランケの王朝であるが、実際に行ってみて洪大容は清朝統治下の文物や人に感心することが多かった。しかし洪大容は衣冠の制や食事の儀礼などの文化面が清では廃れてしまったことに大きく失望した。だが、偶然出会った清朝統治下の漢族知識人である杭州の3人と筆談をすることで、風貌は中華の制度は見えなくても、彼らの中に中華の精神が残っていることに感銘を受け、彼らに同情した。

本稿では最後に、洪大容自身は燕行後に書いた哲学小説『鑿山問答』で、天文学的知識に基づいた独自の華夷観を虚子と実翁という二人の仮想人物の問答形式で提示し、「中国」あるいは「中華」というものは絶対的なものではない、と従来の朱子学的宇宙観を越えた華夷観であり中国観を主張した。文化的側面での華夷観は洪大容自身脱することはできなかったが、朱子学的宇宙観に基づいた華夷観を脱したことを明らかにした。

民国初期における袁世凱帝制論と共和認識

—メキシコ情勢をめぐる議論を中心に—

平川 菜々子

一九一五年の夏より表面化し、一九一六年の初頭に「中華帝國」と「洪憲」年号を出現せしめるに至った所謂袁世凱帝制運動は、中国近現代史における一大政治劇として後世の関心を集めてきた。その最初期において動員され、理論的支柱としての役割を果たしていたのは、楊度の「君憲救国論」やグッドナウの「共和与君主論」といった、学者達の手による国体変更の議論（以下、帝制論）であった。従来の研究において、帝制論は袁世凱個人と結びつけて評価されるか、あるいはその「強権」や「憲政」の主張が注目されてきた。しかし帝制論には政治体制論としての性格だけでなく、同時代の「新興共和国」をめぐる情勢をどのように見るかという「外向的」な視点も含まれていた。マスメディアの発達により、清末から民初にかけて国家建設をめぐる議論や実際の制度設計の現場において海外の事例を参照することは一般的に行われていたが、その際に注目されたのは欧米諸国や日本といった所謂「列強」の事例だけではなく、「列強」には数えられないものの、植民地化されずに独自の政権を保持していた「新興国」の事例も、独立維持と強国化を目指す自国と同じ立場にある国々として意識され、中国

が直面する現実的政治課題解決の糸口を探るための「鑑」として参照されていたのである。そして辛亥革命の前年にあたる一九一〇年にディアス長期政権に対する革命が発生し、その後の内戦やアメリカの干渉によつて国家破綻の危機に瀕していたメキシコの事例は、清末より既に中国でも着目され、特に第二革命発生後には中国にとつての「覆車の戒め」として強く意識されるようになっていた。中国の知識人達は、「リアルタイム」なメキシコ情勢に中国の不吉な「青写真」を見出すことで、政治的に「未発達」な共和国における選挙を契機とした武力闘争発生の可能性と、外資を口実としてその混乱に乗じる外国の干渉の危険性を読み取っていたのである。そして帝制論者もまた、議論的基盤の存在していたメキシコの事例を引用することで、「新興共和国」における大統領制の不安定さと、彼らがより「安定」していると考えた君主制の必要性を主張していった。そこには、国家建設の模索段階にあった民国初期の政治的混乱の中で、国際的潮流も踏まえながらいかに中国の存続を図るのかという、現実的政治課題に対する問題意識が存在していたのである。

ワファアーイーヤ教団長

アブー・アルアンワールとカイロ社会

宮坂 優也

本論文は、一八世紀後半から一九世紀初頭にワファアーイーヤ教団長であったアブー・アルアンワールを取り上げ、当時のカイロ社会における教団長の在り方を検討した。ワファアーイーヤは、アリー・ブン・アビー・タリーブ裔のシャリーフ家系たるサーダート家を母体とし、その家長が教団長を兼任した家族教団であり、一四世紀の創設以降、権威を有する卓越した教団として長期にわたってカイロ社会の中で発展し続けていた。

これまでのオスマン朝期カイロにおける教団研究は概してハルワティーヤ教団中心であり、当該期のワファアーイーヤ及びアブー・アルアンワールについては、その重要性が認められつつも実証的研究は行われてこなかった。また彼の在任期は、エジプト史の重大な時代と同期しており、彼は他のウラマーと同様に政治的にも重要な存在であった。そこで本論文では、ジャバルティーの年代記やワファアーイーヤへの入信者による論攷や聖者伝型著作を用い、アブー・アルアンワールの宗教的活動及び政治的活動を仔細に検討することで、彼の教団長としての戦略的活動と政治的・社会的機能の解明を試みた。

先ず宗教的活動については、アブー・アルアンワールは教団

の創設者たるワファアー父子と異なり神秘思想家ではなかったが、積極的なウラマーとの交流や後援を通してウラマーの入信者を増やしていた。また彼は、自らの邸宅で文学的マジュリスを開催し、自らの聖者性と貴種性を讃える賛美詩、並びにワファアーイーヤの血統や修行道の系譜を記した詩を入信者たちに綴らせることにより、彼自身の権威のさらなる強化に努めていた。加えて、入信者を介するかたちでザウイーヤの改装とフサイン・モスクへの進出を成し遂げ、自らと教団の勢力の拡大を押し進めていた。こうした彼の教団における戦略的な活動は、彼自身の手腕のみならず、入信者との紐帯に基づいていたといえる。

またアブー・アルアンワールは、ベイたちの絶頂期に始まり、フランス占領期を経て、メフメト・アリーによる支配権の確立に至るまでの政治的に不安定な時代において、様々な事件に介入していた。そこにおいて彼は、強い社会的権威を背景に仲裁者としての政治的機能を行使することで、騒動や蜂起、為政者の専横といった懸案の解決に貢献し、社会秩序を維持する役割の一翼を担っていた。

このように本論文は、高い権威を有していたスーフィー教団の教団長における社会的権威の形成とその機能について、一つの具体的な在り方を示したものである。

ムラト三世期の宰相と中央政治

金 東 玄

一六世期中葉、オスマン帝国はスレイマン大帝の下で制度上、一定の完成をみたとみなされている。しかし、早くも孫のムラト三世期になると、帝国の経済、財政、軍事など様々な面において変化がみられるようになった。この変化の性格については、長い衰退の始まりとみなす伝統的な見方と、一種の成熟として評価する修正主義的な見方がある。いずれにせよ、この時期の変化は確かなものであり、このうち経済や軍事面の変化については一九五〇年代から研究がなされてきた。しかしながら、当該期の政治については、派閥の問題などに関する研究はあるものの、経済や軍事面に関する研究に比べると、その数はあまり多くないのが現状である。

そこで、本論文はこの時期における政治面の変化に注目し、そのうち、中央政府の核を成す存在ともいえる大宰相に焦点を当ててみることにした。ムラト三世の時代においては、七人の人物が大宰相や大宰相に相当する地位に延べ一―回任命されている。この七人の経歴を仔細に調べ、スレイマン期に任命された大宰相たちの経歴と比較することで、この時期の政治的な変化の一部を確認できると考えたのである。

その結果として、一人の例外的な存在はいるものの、残りの

六人が大宰相となるまでの経歴については、いずれもスレイマン期に類似するパターンが確認でき、大宰相になるまでの経歴においては有意な違いはないことが分かった。しかしその反面、大宰相への就任後の任期が短くなり、また複数回任命される場合が多くみられるなど、大宰相の地位が不安定になったことも見受けられる。この面ではスレイマン期とは違った様相を呈しているといえよう。

こうした変化の原因としていくつかの要素をあげることができる。一点目は、スルタンが政治から遠ざかったことで大宰相との関係が遠くなる一方、側近の影響力が増したことである。二点目は、長引く戦争の影響で、司令官として派遣された宰相の権力が増大し、大宰相にとって脅威となったことである。三点目は、派閥争いが激化し、そこに端を発する軍事反乱が多発したことである。これらは、確かに中央の政治がスレイマン期のものとは異なる様相を呈する原因となったといえる。他方でこの変化は、スレイマン期から、さらに遇ればメフメト二世の時代からその兆候が表れていたか、或いはそこからの流れを汲んでいるものでもあった。その上で前述のとおり、大宰相になるまでの経歴はスレイマン期のそれとさほど変わらなかったのである。

以上の検討から、ムラト三世の時代は政治的な変化という面において一種の過渡期であったと結論付けられる。そして、この後のオスマン帝国の中央政治においては、オスマン二世の廃位と弑逆という破局を経て、大宰相が主導権を握るようになって

ていくのである。

〔西洋史学分野〕

アビラのプリスキリアヌスの研究

—Würzburg Tractatus の検討を通じて—

林 皓一

本論文は、四世紀末より六世紀頃まで主にスペインで活動したキリスト教異端者アビラのプリスキリアヌスについての研究である。具体的には、プリスキリアヌスによるとされる Würzburg Tractatus の著者の再検討を行った。

プリスキリアヌスは、俗人でありながらも、そのカリスマ性により聖俗を問わず多くの人を引きつけたが、一部の司教に疎まれ、異端者と告発された人物である。彼を支持する人々と、排撃しようとする人々の対立は、スペインという枠を越え、ガリア、イタリアへと拡大したが、皇帝も巻き込み、プリスキリアヌスは魔術師として断罪、処刑された。

教父たちの現存する証言が描くプリスキリアヌス像は、マニ教徒、グノーシス主義者、魔術師であり、研究者たちも、プリスキリアヌスをありふれた単なる異端的セクトの創始者とみなしていた。しかし、一九世紀末にドイツのヴェルツブルク大学図書館において一写本が発見され、発見者のゲオルグ・シユェプ

スは、この写本に含まれる十一の作品の全てがプリスキリアヌスによるものであると断定し、一八八九年に公刊した。そして、この写本の十一の作品、所謂 Würzburg Tractatus の内容が、教父たちの証言と大きく異なっていることが研究者たちの注目を集めた。当然視されていたプリスキリアヌスの異端性が再び問われ、さらに、異端ではないとすれば何故処刑されるに至ったのか、という新たな問題が生じた。

しかし、Würzburg Tractatus という史料の最大の欠陥は、その著者が明示されていないことにある。事件に関与した人名、他の史料との証言の一致から、著者はプリスキリアヌス（あるいは彼の側に立つ近しい人物）と言える作品もあるが、十一の作品の全てがそうであるわけではない。文体から複数著者説を論じる者がいれば、内容の一致から同一著者説を論じる者もある。漠然と、大半の作品がプリスキリアヌス派に帰されるという共通見解はあるが、依然として十一の作品の著者についての定説はない。本論文はこの著者問題を解決すべく、聖書引用という今まで注目されなかった観点から史料の検討を行った。

引用の正確さという点では、十一の作品はいずれも完全に正確とは言えず、そこに傾向は読み取れなかった。しかし、作品間で共通する聖書引用のテキストおよび文脈の比較を行ったところ、複数の作品で一つならず強い関連が読み取れた。中には、複数の引用を同じ文脈で用いている作品群もあった。他方、ある章句に対して、テキストあるいは文脈が大きく異なるという引用は発見されなかった。結論として、同一著者説への消極的

な肯定が示され、一部の作品群についてはプリスキリアヌス本人による蓋然性が高いことが示された。

〔民族考古学分野〕

日本海北部島嶼群におけるイヌの飼育・利用

大西 凜

続縄文・オホーツク文化期の犬骨資料については少なからぬ先行研究が存在する。しかしながら、その系統と飼育・利用の実態は未だ充分な解明をみていない。そこで本研究では、両文化期の遺跡における既知の犬骨出土例を集成・比較するとともに、特に礼文島浜中2遺跡 Nakatan 地点から多出した資料群を詳細に観察・分析した。それらの諸特徴も踏まえ、続縄文・オホーツク文化期のイヌの飼育・利用についての総合的な分析・検討を試みた。

その結果指摘し得た事柄は、以下の通りまとめられる。

- (1) 北海道北部、特に離島の礼文島・利尻島では、続縄文・オホーツク文化を通して出土哺乳類に占めるイヌの割合がことのほか大きい。
- (2) 浜中2遺跡 Nakatan 地点から出土した続縄文・オホーツク文化期の成犬頭蓋骨については、相互に酷似した形態的特徴をもつ。

- (3) 浜中2遺跡 Nakatan 地点出土犬骨の主体は、続縄文・オホーツク文化期を通じて幼犬・亜成犬の資料によつて占められている。

- (4) 出土犬骨はほぼ一様に散乱状態で出土し、埋葬例が見られない。

- (5) 出土犬骨には、解体痕をもつ資料や骨髄の利用を示唆する螺旋状破片が目立つ一方、猟犬やけん引としての利用を示す外傷痕や関節炎などをもつ資料が認められない。

これらの事実は、続縄文・オホーツク文化期の日本海北部島嶼群、特に礼文島・利尻島において、少なからぬ数のイヌが飼育され、食用として利用されていたことを示唆してくれる。先行研究において、オホーツク文化集団は優れた漁撈・海獣狩猟技術をもち、海洋資源を食料として豊富に得ていたことが指摘されている。そして、特に、イヌは魚類を飼料として与えられ、不漁期の非常食料として利用されたと考えられてきた。しかし、自らも利用し得る海洋資源を与えてまで多くのイヌを飼育していたとすれば、イヌの利用目的が非常食料とすることのみであったと結論づけるのは早計であろう。両集団による家犬飼育の目的は、毛皮利用などの可能性も視野に入れ、さらなる考察を加える必要があるだろう。

二〇一四年度卒業論文題目

〔日本史学専攻〕

古代日本における鹿の神聖視と肉食について

古代における服飾の役割―貨幣的役割を中心に―

古代における水と酒の呪力

大津皇子の謀反事件について

日本独自の班田制立制意図

『日本霊異記』における冥界遍歴譚

今昔物語集巻二十七に見える鬼の特徴

平安時代末期における摂関政治のあり方について

―藤原頼通と後三条天皇の関係を中心に―

佐竹合戦の目的を探る

―源頼朝と豪族たちの立場から―

建永の法難の思想的意義

―念仏宗・興福寺・朝廷の関係から―

伊達政宗の重臣とその役割について

―家臣宛書状の内容から―

琉球の三山は実在したのか

いつ、どの様にして琉球王国が日本の一部に組み込まれ

たのか―島津薩摩藩の琉球侵攻を中心に

世界システム分析についての再考察

境界神・性神の二面から探る道祖神の原像と江戸時代に

おける信仰の実像

江戸時代の三井越後屋に見る広告活動の意義

薩長同盟の締結日時の考察

ノヅチ像の受容と変遷について

松井源水から見る近世・近代の香具師の姿

啓蒙思想家西村茂樹の理想国家

「美人」が映し出す大正時代

―近代日本の化粧と美人をたどって

谷崎潤一郎と「支那趣味」について

―小説「鶴唳」をめぐる―

修養雑誌『乃木式』とその立ち位置

大妻コタカと女子教育

元老西園寺公望と「旧山県閣」

炭鉱企業における温情主義の形成とその展開

―戦間期明治鉱業の労務管理を中心に―

野村吉三郎の国防に対する意識

軍事郵便にみる河野榮一の「意識」

戦後教育における農村の意識変革

―東井義雄による戦後教育実践の分析から―

〔東洋史学専攻〕

サウジアラビアと石油開発―イフワーンへの対処と国際

関係を中心として (1925-1935) ―

現代シンナ派法学における非法学派潮流の思想的論理付け

丹野 遼

溝畑 隆

真鍋 将徳

山口 萌

赤川 貴也

小寺 和子

建部 眞帆

野澤 俊介

北田 浩氣

斉藤 希歩

久柁田喜久

松岡 李奈

渡部 敦

浦田 大輔

久光 翔

天野 宏紀

狩野 隼人
ティムール帝国における交易の発展と都市の繁栄
児玉 恵
イスラームと賭博

菰田 純吉
—クルアーンの解釈と戒律の観点から—
長崎清国水兵暴動事件にみる修好条規締結前後の相互認識

佐藤 有華
17世紀のカシーリー家の内紛と周辺諸勢力の動向
杉浦 悠介
フランス領インドシナの幫公所制度と華人管理問題

—保護領期カンボジアにおける租税制度分析を中心に—
高橋 萌

16・17世紀のオスマン朝下における農村社会の貨幣経済化
田中 大貴

イブン・ルシュドと12世紀環地中海世界

田中なつめ
—西欧とイスラームの枠組みを超えて—
マルコ・ポーロの実像

中村 香織
—『東方見聞録』の元朝の記載を中心に—
14世紀末期から15世紀初頭における、琉球と朝鮮の交流
箕輪 適

近代以降のオスマン帝国陸軍の軍装と社会情勢の関連性
渡辺 重幸

〔西洋史学専攻〕

ヴァイキング時代における交易センターとしての都市
岡田可奈子
ヘゼビューの発展

ボニフェイス・オヴ・サヴォイの改革
松本 陽
—カンタベリー大司教行政の発展—

ヘンリー八世時代における奢侈条例の必要性と終焉

関口茉莉花
テューダー朝における「権威の体現者」としての国王
ルンデイン・怜和

北澤 孝祐
ジャーナリズムが名誉革命に与えた影響
吉田 志穂

一八世紀のバースの発展を支えたもの
水越 彩
イギリス階級社会における労働運動

青木 瞳
—チャーティズムの特徴—
ドゥオダの『手引書』にみる俗人貴族教育

小島 朋輝
『聖ヤコブ奇蹟の書』にみる奇蹟の対象とその意図
テンブル騎士団における財産の取り扱いについて

徳永 綺乃
—会則を中心に—
中世ヨーロッパにおける製鉄の意義

西澤 宏一
サン・マルティノー兄弟団の出納簿からみる一四一五
世紀フイレンツェ社会

野口真衣子
フランス革命におけるヴァンデ戦争の意義
藤城 聖菜

三島 綾佳
レオポルト一世治下におけるウィーン建築
坂田 絢香

矢作 沙織
ローマ帝国におけるキリスト教興隆の所以
ナント王令の歴史的意義について

一七世紀フランス絶対王政の実態
—メデアとしてのヴェルサイユ宮殿と演出家たち—

ミン・ウンヨン

詩人が描いた一九世紀―民衆の進歩の物語―

杉山 聡菜

投影されるアンビヴァレンス

―ジャズ・エイジを生きたフィッツジェラルドの二重性

小川 和樹

シオニズムが起った理由とその背景

皆川 広大

エビータ伝説の真実―「田舎町のエバ」はなぜ

松川 葵

「アルゼンチンの聖女エビータ」になりえたか―

アメリカ合衆国がブラウン判決を下した瞬間^{とき}

宮田 真帆

―NAACPの実態とウォーレン・コートのディレンマ―

林 宏美

―映画・ドラマを手がかりに―

一七世紀オランダ東インド会社によるアジア間磁器貿易

―日本磁器輸出とその歴史的背景の再検討―

エンゲルスと民族問題―「歴史なき民」としてのチエコ

人との「歴史的民族」としてのポーランド人―

赤色テロルの起源とメカニズム

―レーニン期食料問題を主軸として― ヤン・A・ウェルズ

小林 裕和

ドイツ社会近代化による農村家族の変化

―奉公人を中心に―

ナチ期の農業政策―ダレーの思想とその具現化―

ナチ的「民族共同体」の現実と政権への同意調達

ナチスによる映画統制および宣伝活動について

近代ドイツにおける教育と青年運動

住瀬 棕亮

一九世紀初頭ドイツにおける農村の民衆とロマン主義

―「粉挽き場」と「水車小屋」―

高橋 功武

〔民族学考古学専攻〕

見るものから聴くものへ

―デ이지リドゥーに見る文化の資源化について― 石田 萌絵

紀元前20000年期のメソポタミア・アナトリア間の関係

の考察―カニシュ遺跡出土のスタンブ印章、円筒印章、

及び印影の分類の考察、再定義を踏まえて― 市原 由衣

History of Los Angeles and Palm Trees-Representation

in Verticality and Horizontality- 稲田樹莉亜

古典期アテネの墓碑における福部説の妥当性の検討

―浮世絵・写真資料を用いて― 神岡 祥子

両国橋の表象の変遷

―浮世絵・写真資料を用いて― 佐藤 奈々

ビザンツ時代パレスチナ地方のキリスト教教会舗床モザ

イクにおける「生命の木」図像について 杉野麻依子

古代エジプト新王国時代のファイアンス製浅鉢型容器

ニューアイルランド島・マランガン像に見る交渉の物質文化

研究―博物館・美術館収蔵資料を中心として― 臺 浩亮

布教期におけるキリシタン遺物

―十字架の流入プロセスの検討― 高田 菜奈

文様の配置からみた東北地方北部縄文時代中期末葉から

後期初頭土器編年

高山 理美

近世江戸市中の階層差について

富田 啓貴

―埋葬施設と人骨形態から推定する―

服部 太一

オホーツク文化期におけるブタの飼育・利用

メディネット・ハブ葬祭殿におけるハトホル図像表現の特異性

久永 瑠美

日本委任統治期のパラオ・バベルダオブ島における日本人村

―時空間の中に読む景観の変化―

松原 安奈

博物館ジオリマ・復元図のジェンダー表現に見る製作現場のせめぎ合い―神奈川県と東京都の資料を中心に―

宮崎 渉

縄文時代におけるマグロ属の利用

―岩手県宮野貝塚出土資料の検討―

吉田 彩乃

日本のロボットアニメに見る時代変化

和氣かづき